仏教における業・因果論の変遷

矢島　道彦

因果は昔から大きな問題でした。論理的な計算式に置き換えて済ませられれば、難しくはありません。しかし、現実に直面する問題と結びつけようとすると、とたんに難しくなります。複雑で理不尽な出来事がさまざまに出来する現実世界は、解きほぐせない、もつれにもつれた糸のようなものかもしれません。「解を得ること」は至難にも思えます。

柳澤先生のお話のように、いたいけない子どもが無残にも殺されることが、現に頻繁に起こっています。なぜ？と思い、調査しても、科学的・合理的な説明がどこまでできるのでしょうか。因果関係がある程度判明しても、被害者やその家族を考えれば不条理極まりない現実に、ただ憤りを覚えるばかりです。

今日は、瑩山禅師の人間観がテーマです。特に問題になる仏教の業・因果論について、基本的な事項を話します。「変遷」という言葉をタイトルに入れたことを、少々後悔しています。私はインド関係のごく狭い領域しか研究していません。史的な変遷まで含めての議論は、とうてい手に負えません。順序立てて話すには三十分と時間が短す

ぎます。そこで、学生さんにもわかるように、また、前座にもなるようにと思いついたのが、「アングリマーラ」の話です。仏教の経典に出てくるアングリマーラの物語は、例の京都五条の橋の上で出会った弁慶と牛若丸の話の原型とされるものです。真偽はわかりませんが、よく似ています。

仏教を生んだインドには、昔から生き物は死んでは生まれ変わるという輪廻転生の世界観があります。この輪廻思想をベースにインド人の死生観や人生観が形成されてきました。さらに、業（カルマン）の考え方、つまり、人間の行為には不可避的に結果が伴うという業思想が出てくると、神さまなど一元的原理をたてなくても、不条理な出来事なども一応は整合的に説明がつくことになります。

仏教はもともと、当時の沙門宗教の一つとして反バラモンの宗教として成立しました。つまり、一元論的な考え方に強く反対する立場です。沙門宗教も色々ありましたが、仏教はその中で、どんな思想的な立場をとっていたかを、レジュメに示してあります。仏教ではそこにある三つの考え方を否定しています。すなわち、①必然論、②神意論、③偶然論、です。②の神意論は、一切のものは主宰神の創造作用を原因としているという考え方です。世界をコントロールするような存在は認めないというのが仏教の立場です。

西欧の一神教の伝統では、一般に神が道徳の根拠であると考えられていますが、ここでは万能の神は自由意志に基づく道徳を破壊するものとして退けられています。この点は、中村元先生が指摘されました。

①の必然論というのは、業を説く仏教でなぜこれを否定するのか、疑問に思われる方もいるかもしれませんが、この点が一番重要です。仏陀は意識的に否定しています。当時、決定論者で有名だったゴーサーラの主張と、それに対する仏陀の有名な見解を、レジュメに掲げてあります。人間の努力、意思の自由を一切認めないゴーサーラの宗教は、じつは長くインドにおいてアージーヴィカ教として影響力を持っていました。これが仏陀によって厳しく

批判されたのです。

ゴーサーラの主張は、そこにあるように「生けるものたちが汚染されることに関しては、因もなく縁もない」という無因無縁論です。「生けるものたちは因もなく縁もなく汚染されている。また生けるものたちが清められることに関しても因もなく縁もない。生けるものたちは因もなく縁もなく清まるのである」と主張します。そして、これは有名な比喩ですが、「あたかも糸巻きが投げられると、解きほぐされて糸がつきてしまうように、そのように愚者たちも賢者たちも（生存が終わるまで）流転し輪廻して、（そののち）苦しみを終滅するのである」といいます。

つまり、いつかは必ず、終わりのときが来る。だから、今の苦しみを甘受せよ。人間が努力しても無意味である、という主張です。このようなゴーサーラの考え方を、最も悪質で、多くの人を苦しめ、傷つけ、害する考え方であると、仏陀は強く否定したとされています。

仏陀の立場は、簡単にいうと「自由意志を認める」、「人間の努力で道は拓かれる」という立場でした。最初から決まっているとか、なるようにしかならないとか、また世の中すべて偶然の所産であって、デタラメであるといった考え方は認めないというのです。

問題点は、当時すでに一種の社会的通念になりつつあった業報輪廻の世界観をどうするかでした。業と輪廻は業報輪廻の思想として、一体的に説かれることが多いのですが、実際はいろんな立場が見られました。仏陀の立場は、善悪の観念や道徳律を破壊しないために、そのレベルで認めるというものだったと考えられます。

輪廻については、バラモン教や他の宗教では「アートマン」とか「ジーヴァ」という言葉で、恒常的な実体として輪廻する霊魂のようなものを説いていました。しかし仏教では、そうした実体を明確には立てないという立場を

選択しました。この辺は説明が難しいのですが、本体的な「アートマン」のような実体は、初期の仏教では説いていません。

こうした仏教の立場や態度は、その後のインド、中国、日本に伝播していく過程で、どうなっていったのでしょうか。時代や伝播する国や地域によって受け取り方に違いがあるのは当然で、仏教発生時の思想状況の中で慎重に選ばれた思想的立場が、そのまま理解され伝えられていったのかというと、果してどうでしょうか。少なくとも表面上は、実に多様な変化が見られます。それぞれの時代や文化、地域性を考えると、実際にどうなったかを問い直すことは重要です。

そこで、アングリマーラの物語は、こうした業・因果論の変遷を考える上で、格好の材料だと思いました。レジュメにその要約を記載しています。これにはいろいろなバージョンがあります。ここに出してあるのは、たぶん一番初期の形に近いと思われるもので、テーラヴァーダ仏教圏（スリランカ・タイ・カンボジアなど）に伝えられているパーリ語聖典の『アングリマーラ・スッタ』です。あわせて、『賢愚経』とか『出曜経』といった漢訳経典のなかの伝承とも比較し、内容が大きく異なる部分は、括弧に入れて紹介しています。読んでみますと、

コーサラ王国のパーセナディ王の領内にアングリマーラと呼ばれる凶賊がいました。殺した人の親指で首飾りをつくり、身につけていたので、アングリマーラ（「指の首飾りをした人」の意）と呼ばれていました。人々は恐れ、逃げ出して、村や町は廃墟同然になっていました。あるとき仏陀は托鉢を終えてから、凶賊の出没する街道を歩いて行きました。恐ろしい賊が出るからと人々は必死に止めましたが、仏陀は沈黙したまま進

んで行き、そしてついに凶賊の目に留まることになりました。

これがパーリ語で書かれた『アングリマーラ・スッタ』の物語の前段ですが、漢訳経典では話が違っています。アングリマーラはバラモンの師に弟子入りし、熱心に勉強していましたが、ある事件をきっかけに人生を狂わせてしまった、ということが書いてあります。

もう少し詳しく紹介します。アングリマーラはバラモンの下で学問に精励中、バラモンの妻に誘惑されたというのです。かれは相当ハンサムだったようです。その誘いをアングリマーラが拒否したため、この妻に恨まれて、妻は帰宅した夫にアングリマーラに陵辱されたと訴えました。バラモンは怒って、弟子を破滅に追い込もうと、修行を完成させるためだといって、街道で人々を片っ端から殺し、一〇〇本の指を集めて指（アングリ）の首飾り（マーラー）を作れと命じました。

インドは徒弟制度の厳しいところです。師には逆らえません。命じられた通り、かれは次々と人を殺して、残すは一人となりました。「一〇〇本」が「一〇〇〇本」になっている伝承もあります。弁慶の長刀はたしか一〇〇〇本だったように思います。「見境なく殺し、最後には実母まで殺そうとした」と漢訳経典ではなっています。そのときに現れたのが仏陀でした。

南伝のパーリ語の伝承では、最初から「凶賊」として出てきますが、じつはよく注意してみると、韻文のなかに本当の名前は「アヒンサカ」といったと書いてあります。つまり、「ヒンサー（殺したり、傷つけたりすること）をしない」という意味です。ですから、いろいろ見方はあるでしょうが、本来は善良な優しい青年だったのに、師匠の命令でいたしかたなく人殺しをさせられた、という話だったようです。漢訳経典に伝わっている話は、ほとん

どそうなっています。

では、誰が悪いのかという話になります。ある大学で、このアングリマーラの話を紹介して、学生さんにアンケートをとってみたそうです。すると、一番多かったのは、悪いのは「本人」あるいは「バラモンの師匠」だという回答だったそうです。しかし、一人だけですが、「そこまで放置したお釈迦さま」が一番悪いと答えた人もあったそうです。この話は、『歎異抄』の第十三條に語られている唯円房と親鸞聖人のやり取りにつながっていきます。

ところで、狂ったように殺人をしていたアングリマーラは、なんと仏陀に出会うとたちまちに改悛し、武器を捨てて出家します。『アングリマーラ・スッタ』では、アングリマーラが仏陀を殺そうと、いくら全力で走っても追いつけない。これはお釈迦さまの神通力ですが、そこでアングリマーラが「止まれ」というと、「私は止まっています」と仏陀は答えます。それは「私は暴力を一切放棄しています」、「あらゆる武器を収めています」という意味でした。

この出来事によってアングリマーラは出家したのですが、住民の訴えでコーサラ国のパセーナディ王が軍勢を引き連れ、アングリマーラを捕まえにやって来ます。ところが、仏陀の傍らには、出家して髪を落とした穏やかなアングリマーラの姿がありました。アングリマーラは少欲知足に徹し、いわゆる頭陀行に専念していたのです。王はこれに感嘆し、軍勢に退去を命じます。

この部分は重要なので、パセーナディ王とブッダのやりとりを紹介しておきます。

パセーナディ王がものものしい軍勢を引き連れて、アングリマーラを捕まえに行くと、「大王よ、どうしたことですか。これからマガダの国を攻めようとしているのですか？　リッチャヴィ族やそのほかの国でも攻め

ようとしているのですか？」と仏陀に問われます。あまりにも、装備が大袈裟だったからです。

「いいえ、私はほかの国を攻めようとしているのではありません。この領内に恐ろしく残忍な人殺しのアングリマーラが潜んでいるという情報が入ったのです。彼を捕まえようとやって来たのです」とパセーナディ王は答えました。

すると仏陀は、「大王よ、その世にも恐ろしいアングリマーラが、もし改心して、髪を剃り落とし、黄色の衣を身にまとって修行僧となっていたらどうなさいますか？　修行僧として戒を守り、一日一食の生活をし、異性とも交わらず、身の振る舞いも正しく、性質もすっかり変わっていたならば、貴方はどうなさいますか？」と問います。

王は、「仏陀よ、もしも彼が本当にそのようになったら、私は敬い尊んで礼拝するでしょう。供養したり、招待もするでしょう。でもそのようなはずはありません。性質の恐ろしく残忍な彼が自分を抑えることなどできるものではないと思います」と答えました。

「大王よ、これがアングリマーラですよ」と、仏陀がかたわらに坐っている一人の修行僧を指していったとたん、王は恐怖のあまり体がこわばり、毛が逆立ち、わなわなと震えました。

そこで仏陀はいいます。「大王よ、恐れることはないのです。もはや貴方を恐れさせる何ものもありません。」目の前の穏やかな修行僧が、本当にアングリマーラであることを確認すると、約束どおり王は供養を申し出ました。しかし、その僧侶は穏やかな口調で申し出を断りました。

アングリマーラが厳しい頭陀行に専念している様子がこの文面からわかります。これで王も驚き、あれほど残虐

なアングリマーラを、本当に仏陀は救われたのだと感激して、軍隊に退去を命じたという話です。もちろん、これは出家を隠れ蓑にするような話ではありません。アングリマーラは仏陀の教えに触れ、それまでの行為を心から反省して、厳しい頭陀行を行ずる出家者になっていました。そこで、もはや王法によって、つまり世俗的な法で裁く必要はないと、王も判断したものと思われます。

要約を続けます。

ある日、アングリマーラは托鉢に出て、難産に苦しむ妊婦を見ます。そこで、どうすれば救えるかと仏陀に相談しました。すると、妊婦の前でこういいなさいと仏陀に教えられます。

「私は生まれてこの方、自分の意志で生き物を殺したことはない。この言葉の真実にかけて、安らかに胎児を出産されますように。」

「仏陀よ、それでは嘘をつくことになります。なぜなら私は自分の意志で多くの人の命を奪ってきたのですから。」

「それでは、聖なる道に志すものとして生まれ変わって以来、自分の意志で生き物を殺したことはない。この言葉の真実にかけて、安らかに胎児を出産されますように、といいなさい」

アングリマーラがその言葉どおりにすると、婦人はたちまち苦痛から解放されて、あっという間に分娩しました。その後、アングリマーラは熱心に修行を積んで、迷いの生存を離れて阿羅漢となり、悟りを得ました。

しかし、この物語はこれで終わっていません。

あるとき彼が托鉢に出ると、この僧がかつて恐ろしい凶賊であったことを知った人々が、積年の恨みや憎しみを晴らそうとばかりに、アングリマーラを殴打しました。ある者は石を投げつけ、またある者は棒で打ちつけ、アングリマーラの頭からは血が流れ出て、鉢は壊され、衣は引きちぎられました。その姿を見て仏陀は、次のようにいいます。

「忍受せよ、アングリマーラよ。きみがこれまでに行ってきた行為の報いとして、幾年、幾百年、幾千年の長い間、地獄に生を受けたであろうに、その行為の報いを今ここに受けているのだ」。

以上のアングリマーラの話から、重要な点を整理します。

出家し、「聖なる道に志すもの」に生まれ変わることで、世俗的な王法によって犯罪人として処罰されることからは免れています。パセーナディ王の退去がこれを示しています。すっかり生まれ変わっていたアングリマーラをみて、王法によって裁くことを王は中止しています。

また、アングリマーラは厳しい頭陀行に専念していることが経典からうかがえます。ということは、かれにはすでにある種の宗教的能力が備わっており、俗人はその恩恵を受けることが期待されます。あるいは、インドの伝統的な考え方で、真実を語る言葉（真言・マントラ）には力があるという信仰（サティヤクリヤー）があります。そうした宗教的な力や信仰によって、アングリマーラは難産で苦しむ女性を救っています。

じつは、この『アングリマーラ・スッタ』は、その後テーラヴァーダ仏教圏で安産祈願の防護呪ともなり、今日でも『メッタ・スッタ（慈しみの経）』『ラタナ・スッタ（宝の経）』などとともに、除災招福のパリッタ呪（防護

呪）に加えられています。

最後に重要なことですが、阿羅漢となって輪廻世界への再生はなくなっても、行為の報い（業報）は甘んじて受けなければならないことが明示されています。堕地獄に代わる苦しみを、人々からの殴打という形でアングリマーラは経験させられています。これはある種、中国仏教でいう償債、減債などにも通じる考え方かとも思われます。

こうした形で善悪の観念を否定しない、道徳律を破壊しないということが重視されていました。中村元博士によると、因果の観念は仏教にとって本質的なものであり、また仏教独自のものであったとされています。じつは仏教が輸入される以前の中国には、「因果」という言葉自体がなかったといわれています。東アジア諸国で因果の観念が明確になっていったのも、仏教の影響ではないかとされています。

仏教における因果関係は、主として二つの点でいわれるとみられます。一つは人間の心理現象に関するもので、倫理的、宗教的な価値付けを伴った心理現象を因果関係で説明します。いわゆる縁起論のことです。そしていま一つは、因果応報というような、道徳的な因果関係です。これも中村先生が述べておられることです。

大乗経典になると、とくに涅槃経類のなかに、『央窟摩羅経』というのがあり、また敦煌出土の文献で菩提達磨に帰されている『絶観論』なども、思想的変遷を考える上では重要ですが、ここでは最後に、さきほども触れた『歎異抄』から関連する部分を紹介します。アングリマーラの話を真似てというか、それを念頭に置いて、親鸞聖人が弟子の唯円房に訊ねています。往生のために、人を千人殺せと命じたらどうするかと。

よきこゝろのおこるも、宿善のもよほすゆへなり。悪事の思はれせらるゝも、悪業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兎毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。またあるとき唯円房はわがいふことをば信するかとおほせのさふらひしあひだ、さんさふろうとまふしさふらひしかば、さらばわがいはんことたがふまじきかとかさねておほせのさふらひしあひだ、つつしんで領状まふしてさふらひしかば、たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしとおほせさふらひしとき、おほせにてさふらへども一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼへずさふらうとまふしてさふらひしかば、さてはいかに親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし。なにごとも、こゝろにまかせたることならば往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて害せざるなり。わがこゝろのよくてころさぬにはあらず。また、害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべしとおほせのさふらひしかば、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことをしらざることをおほせのさふらひしなり。（『歎異抄』第十三條岩波文庫 p. 33-34）

一見すると、「兎毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべし」などとあり、非常に宿命論的にみえます。現に、このやりとりについて、岩波文庫の訳注者は、「善悪は宿業に制約されたものであるから、廃悪修善の努力は成就しないことを、聖人の仰せ及び聖人と唯円房との対話を引証して述べてある」などと解説しています。（梅原眞隆訳註、同上書 p. 37）しかし、こうした理解は誤りであるということを、たとえば最近、川崎信定先生が主張されています。川崎先生が東洋大学を退職されるに際して行われた最終講

義ですが、次のように述べておられます。

「このように述べますと、親鸞聖人が運命決定論・運命論者・宿命論者のように聞こえて、自らの努力・自己責任を放棄しているように思われるかもしれませんが、決してそうではありません。宿縁・宿業といっても、よく俗にいわれるように、原因が遠く自分の手の届かない昔にあって、例えば過去の先祖がなにかをしたのが祟るといった、今の自分には責任のない、自分に関係のない話ではありません。むしろ、日常ありきたりの一挙手一投足が『宿業にあらずといふことなし』と親鸞聖人が説いているように、宿縁・宿業によって現在のわたくしがわたくしたらしめているのであり、己れが己れを構成することになっているのです。」（川崎信定「ほとけの知恵と力と、そして温もりを・・・―最終講義　東洋大学を去るに当たって―」『東洋大学論叢』第31号〔東洋大学文学部紀要弟59集〕２００６年3月 p. 29）

与えられた時間をすでに超過していますので、終わりたいと思いますが、とにかく道徳の破壊や運命論、決定論につながる考え方や表現は、初期の仏陀の時代には極めて慎重に避けられていました。その点は強調しておきます。空や無我、縁起といった仏教の根本思想は大切です。しかし、般若、空の思想などをパラドキシカルに説いている大乗経典などには、ときに仏教の基本的な倫理観や道徳律などの問題をどう考えているのか、疑念を抱かざるを得ない場合も見受けられます。仏陀が重んじた、道徳律を尊重する立場が失われていないかどうか、私たちはつねに慎重に吟味しなければならないであろうと思われます。